

認知意味論、コミュニケーション、共同注意 ——捉え方(理解)の意味論から見せ方(提示)の意味論へ——*

本 多 啓

This paper investigates the possible contributions of cognitive semantics to the study of communication. After proposing an application of cognitive principles such as figure-ground reversal and metonymy to communication, we will advance a modification of the semantics of understanding into the semantics of presentation. We will then consider its relation to joint attention and the social construction of cognition, and present further case studies.

Keywords : 認知意味論、共同注意、理解の意味論、見せ方の意味論、認識の社会的構成

1. はじめに

本稿は、認知意味論に基づく意味論研究で標準的に受け入れられている諸概念をコミュニケーションに適用することを試み、それを通じて認知意味論の枠組みの拡張を図る。まず第2節で、事実だけを語りながら事実と反する信念を聞き手に持たせるというコミュニケーションのあり方を検討することを通じて、コミュニケーションを研究する上での認知意味論的な概念の有効性を探る。第3節では、認知意味論の基本的な立場としての「理解の意味論」の考え方を、コミュニケーションをより自然に扱えるために拡張した、「提示の意味論」を提唱する。第4節でそれを共同注意(joint attention)と関連づける。これにより、個体能力主義・独在論的な意味論を脱却し、認識成立の社会性を視野に入れた、よりコミュニケーションの研究にふさわしい形の認知意味論の可能性を探る。第5節および第6節で認識の社会的構成の言語における具体的な現われを、日本語の副助詞タリおよび婉曲表現を事例として見ていく。第7節が全体のまとめとなる。

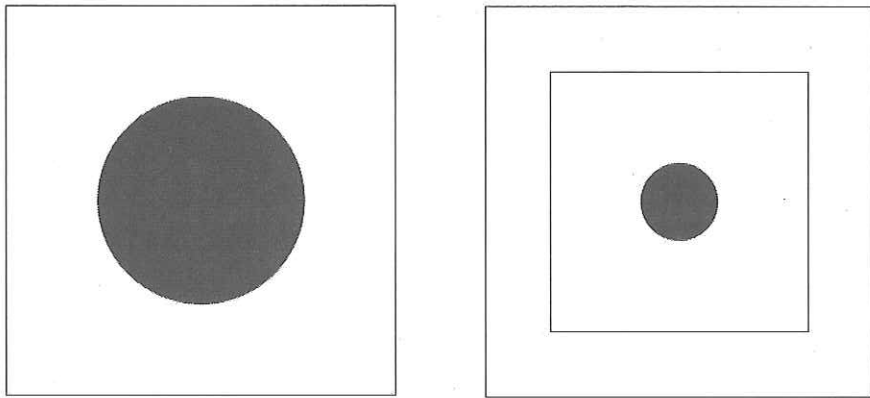
2. 事実だけを語ることによって、事実と反する信念を聞き手に持たせるストラテジー

2.1. 図と地の分化・反転

認知言語学の文献において図と地の反転が取り上げられる場合、知覚経験の例としては「ルビンの壺」が提示されることが多く、また、言語においては次のような例が示されることが多い。

- (1) a. Bees are swarming in the garden.
b. The garden is swarming with bees.

ここでは別の観点から検討したい。まず、次の二つの図を考える。



この左の図は通常は「白地に黒」と見るのが普通であろうが、あえて反転させて「黒地に白」と見ることも可能である。「白地に黒」と見た場合に、そこに見えたものを言語によって報告すれば、「黒い円」となるであろうが、反転させて「黒地に白」と見た場合には、「中心に丸い穴が開いた四角形」のようになるであろう。

もっとも、「中心に丸い穴が開いた四角形」という言語報告から聞き手が想像するものは上の左の図のようなものとは限らず、右の図のようなものを想像する可能性もある。「中心に丸い穴が開いた四角形」という捉え方は、右の図に対しては自然な捉え方であるが、左の図に対しては自然な捉え方ではなく、また聞き手は通常話し手が状況に対して自然な捉え方をしている想定すると考えられるからである。しかしこのことは、「中心に丸い穴が開いた四角形」が左図についての報告でありうるということ自体を否定するものではない。

このような場合の図地の反転に対応する言語現象としては、次のような例を挙げる事が

できる。

(2) 学生：先生、どこに住んでるんですか？

教員：日本！

(3) 私はこれまでの生涯で、「彼氏」と呼べる人がいたことは一度たりともありません。でもそのことで寂しいと思ったことは一度もありません。これは強がりなんかではありません。本心です。

(4) a. 「合成保存料不使用」(乾物など、もともと保存料自体を必要としない食品につけられた表示) (『毎日新聞』(2005年6月5日))

b. 「遺伝子組み換え原料不使用」

(そもそも遺伝子組み換えが認められていない作物を使用した食品につけられた表示) (『毎日新聞』(2006年3月21日))

これらはいずれも、「前提の焦点化」とでも呼べるプロセスが関わっている。すなわち、「あまりに当たり前すぎて通常は注目しないところに、あえて聞き手の意識的な注意を向ける」ことが行われている。

(2) は、数年前、筆者の勤務する大学で実際にあった会話である。バス停でスクールバスを待っていた教員に、担当しているクラスの女子学生2人(部活動の帰り)が声をかけてきたのに対して、その教員がとっさに上のように答えたのである。その教員(男性)がそのような奇妙な返答を返したのは、女子学生たちが「自宅まで車で送みましょう」と言い出すのを未然に防ぐためであった。

(3) は、「カオル」と名乗る男性研究者による、インターネット上の日記からとったものである¹⁾。このテキストにおいて「カオル」はペンネームであり、そのかぎりにおいてこの日記の筆者は事実に反することを述べていたことになる。しかしここで問題になるのは筆者の性別である。「カオル」が女性だけではなく男性にも用いられる名前であることを考慮すれば、この筆者は性別に関しては事実に反する言明を行っていたわけではないと言える。しかも(3)の内容は、(同性愛でない)男性にとってはすべて事実でありうることである。現実にはこの日記の筆者は女性と勘違いされ、「彼氏いない歴=年齢」としてネット上の掲示板で話題にされることになった。

これらはいずれも、知覚経験における図と地の反転に対応する言語現象であると言える。(2)や(3)は単なる悪ふざけで済ませられるものであろうが、(4)のようなものになると、企業倫理上さらには法律上の問題も生じてくる。

2.2. テクストのレベルにおける、意図的に不完全に構築された換喩

2.2.1. <全体>についての百科事典的な知識が共有されない場合

本節では全体と部分の関係に基づく換喩とコミュニケーションのつながりの一側面を検討する。西村(2002)などに述べられているように、換喩の認知的な基盤は<参照点能力>と<百科事典的な知識>である。これをコミュニケーションの観点から捉えなおせば、関連する百科事典的な知識が話し手と聞き手の間で共有・活性化されているかいないかで、換喩を含む表現は異なるコミュニケーション効果を持つことになると言える。

具体的に、次の例を見てみよう。これは、地下鉄千代田線をよく利用する東大助教授がインターネットに書いた日記の一部である。

(5) 「ここぞとばかりにアナウンス」(2006.5.18)

「本日湯島駅におきまして、迷惑行為によるお客様同士のトラブルのため、列車6分ほど遅れての到着となりました。お客様にはお急ぎのところご迷惑をおかけ致しましたことをお詫び申し上げます」

千代田線の車掌が、駅につくたびにしつこくアナウンスしていた。

でも湯島に入る前からちょっと遅れてたじゃん²⁾。

この日、千代田線で起こった出来事の全体をこの記述に基づいて再現すれば、おそらく次のようになるであろう。

(6) 列車が湯島に到着する前に何らかの事故が発生した。

その結果、列車の運行が若干遅れた。

湯島の駅で、迷惑行為による利用者同士のトラブルが発生した。

その結果、列車の運行がさらに遅れ、合計で約6分遅れとなった。

この出来事全体のうち、車掌のアナウンスで言及されているのは太字で示した部分だけである。すなわち、このアナウンスは、出来事の全体(列車の遅れの原因)を説明するのに、原因の一部だけに言及するというストラテジーをとっている。これはいわば、テキストレベルの換喩といえることができる。

ただし、このテキストが認知言語学の文献で通常取り上げられる換喩の例と異なる点は、聞き手となる乗客の中に、出来事全体についての知識を保持・活性化させている人と、そうでない人がいるということである。そしてこの2種類の聞き手にとってこのアナウンスがもつコミュニケーション効果は、大きく異なるものとなる。

次の例は、ある盗用事件の判決を報じた複数の新聞の見出しである。同一の判決を報じて

いるにもかかわらず、正反対の内容になっている。

(7) a. 「天声人語が盗用」認めず、新潮社に賠償命令 東京地裁

(『朝日新聞』 電子版、2004年9月17日)

b. 「天声人語が盗用」に相当な理由 週刊誌記事、賠償責任を否定

(『京都新聞ニュース』 電子版、2004年9月17日)

事件は、『週刊新潮』が天声人語の2本のコラムを盗用として取り上げ、それに対して朝日新聞社が賠償を求める訴訟を起こした、というものである。判決の概要は、そのうちの1本に関しては、盗用と判断されてもやむをえないだけの理由があるとして新潮社の賠償責任を否定したが、もう1本に関しては盗用の可能性が無いとして新潮社の賠償責任を認めた、というものである。

(7a) の見出しは、2本のコラムについての判決のうち後者だけに言及し、(7b) の見出しは、前者だけに言及しているわけである³⁾⁴⁾。

2. 2. 2. <全体>についての百科事典的な知識が共有されていると想定できる場合

(8) 私は学食に入った。ランチが載ったトレイはいつもより重かった。友達はおいしそうに食べていた。話が弾んで次の授業に遅れそうになった。

このテキストには、「自分がランチを食べた」とは明記されていない。しかし、学食についての百科事典的な知識を参照しながらこのテキストを解釈する読み手は、ほぼ自動的に「書き手はランチを食べた」ということを補完する可能性がある。そして実際、書き手はランチを食べた可能性が高いといえる。

しかしながら、「書き手がランチを食べた」と明記されていない以上、ランチを食べたのが書き手ではなく「友達」であるなど、書き手が実際にはランチを食べていない可能性があることを、このテキストは排除しない。

その結果、このテキストに対する書き手の立場として、次の2通りが生じる可能性が生まれる。

(9) a. 書き手は自分がランチを食べたと (実質的に) 伝えたと考えている。かりに明記されていなくても、自分がランチを食べたことは「常識」から当然と判断されるべきであると考えている。

b. 書き手は自分がランチを食べたとは伝えていないと考えている。

そして時に書き手は、この二つの立場を使い分けることがある。

3. コミュニケーション理論に対する意味合い：理解の意味論から、提示の意味論へ

ここで、本稿の議論の持つ理論的な意味合いに触れておきたい。

認知意味論は「理解の意味論」あるいは「捉え方の意味論」とも言われる。すなわち、言語表現の意味を指示対象とみなすのではなく、対象に対する話し手の理解ないし概念化の仕方（あるいは捉え方）または概念化のプロセスそのもの（conceptualization）と考える立場である。この立場は、次のようにまとめることができる（本多 2005）。

(10) 理解の意味論／捉え方の意味論：

話者（認識・表現者）が、どのような対象をどのように捉えて（construe; あるいは認識して）表現するか。そのような捉え方を背後から支えている認知のメカニズムはどのようなものか。

この考え方は、客観主義的な指示対象意味説を棄却するという点においては支持できるものである。しかしこれに関して、考慮すべき点がある。

理解の意味論は、解釈の仕方次第では、＜概念化の主体＞と＜概念化の対象＞という二項関係のみを視野に入れた意味論ということになる。これは極端な解釈をするならば、コミュニケーションに対する自覚的な考慮を欠いた、独在論的な意味論となりかねないものである⁵⁾。したがって、この見方を文字通りに取るならば、言語能力がコミュニケーションの能力と密接に関わっているということを理論に取り込むことができなくなるわけである。

第2節の例が示しているのは、言語表現に、他者（聞き手）の注意（attention）をある特定の対象に特定のやり方で誘導する機能があるということである⁶⁾。ここで筆者が念頭においているのは、＜話し手＞＜聞き手＞＜表現の指示対象＞という三項からなる「共同注意（joint attention）」である。本多（2005）で Reed（1996）などに基づいて述べたように、言語の基本的な機能は共同注意を成立させることにあると考えられる。すなわち言語には（11a）の機能がある。そしてここに理解の意味論ないし捉え方の意味論の観点を取り入れて太字で示すならば、言語による表現行為の基本的な機能は（11b）にあることになる。

- (11) a. 話し手が注意を向けている対象に対して、聞き手に注意を向けさせる
 b. 話し手は、自分が注意を向けている対象に対して、自分がその対象を捉えている（認識している）のと同じ捉え方で聞き手が捉えるようなやり方で、聞き手の注意を向ける

このような言語観を踏まえると、意味論の課題は、「どのような対象をどのように捉えて表現するか」に加えて、「聞き手に対してどのように提示するか」という面を含むことになる⁷⁾。そのような意味論に対しては、「捉え方の意味論」という呼び方は妥当ではない。視覚メタファーを用いて名づければ、「見せ方の意味論」となる。

このような見方では、上記(10)は、次のように改められることになる。

(12) 理解・提示の意味論／見せ方の意味論：

話者（認識・表現者）が、どのような対象をどのように捉えて（construe; あるいは認識して）聞き手に提示するか。そのような捉え方を背後から支えている認知のメカニズムはどのようなものか。

ここで、「どのように」は「捉えて」だけでなく、「捉えて聞き手に提示するか」全体にかかる。すなわち、(対象についての) 認識と(聞き手に対する) 提示は相互に独立したのではなく、緊密に関係しあっている。これは、先に述べた「自分がその対象を捉えているのと同じ捉え方で聞き手が捉えるようなやり方で、聞き手の注意を向ける」ということの帰結である。

この、「何に・どのように・注意を向けさせるか」あるいは、「注意を向けるに値する対象として何を提示するか」がその重要性をあらわにするのが、第2節の例であった⁸⁾。

4. 認識の社会的な成立と共同注意

視覚の場合、共同注意を成立させる方法は二つある。一つは自分の注意の向け方に相手の注意の向け方を合わせさせる方法（視線誘導）であり、もう一つは相手の注意の向け方に自分の注意の向け方を合わせる方法（視線追従）である。本稿でここまで検討してきたのは、前者の、視線誘導に相当する現象である⁹⁾。

注意の誘導において、話し手は自分の注意の向け方に聞き手の注意の向け方を合わせるわけであるが、話し手の注意の向け方はこの場合においてさえも聞き手の存在と完全に独立して決まるわけではない。すなわち、(12)において、理解・認識は提示に一方向的に先行するわけではない。

再び視覚メタファーを用いて述べるならば、話し手は事態を自分が見たとおりに聞き手に見せるわけであるが、その際、話し手自身の「見方」は、聞き手に対する「見せ方」と完全に独立に、それに一方向的に先行して純粹に話し手と対象の関係だけで決まるわけではない。聞き手の存在が、あるいは、聞き手に対する「見せ方」に関わる事情が、話し手の「見方」に影響を与える面がある。「自分がその対象を捉えているのと同じ捉え方で聞き手が捉えるようなやり方で、聞き手の注意を向ける」を達成する際に、聞き手の捉え方にあわせて話し手

が自身の捉え方を調整することがありうるわけである。このことをはっきりと示すのが、日本語の副助詞タリの用法である。

5. 副助詞タリ

タリ¹⁰⁾には、その一つの意味・用法として、話し手がある事態を、〈生起の必然性がない〉と認識したことを示す働きがある。その表現効果として、〈確信が持てない事態〉〈思いつき〉〈生起の可能性があると感じられる事態〉〈意外と感じられる事態〉〈不都合・受け入れ困難と感じられる事態〉などを表しうることになる。

(13) a. デスチャ7年、キャンディーズ5年、浅田真央ちゃんが4年後スケート辞めてたりして¹¹⁾ 〈確信がもてないこと〉・〈思いつき〉

b. 普段何気なく通り過ぎてる場所でも、図書館とかでよくよく調べてみると意外な有名人がやって来てたりするんだよ¹²⁾ 〈生起の可能性があると感じられる事態〉

c. 複線経路というのは、さまざまな道がある、ということを表す語です。かみ砕いていうと、人生いろいろでも結果は同じだったりするよというモデルです¹³⁾。

(サトウ・渡邊 (2005:221)) 〈意外と感じられる事態〉

d. で、今日は晴れてお休みです でも、今日、起きたら家事が山のように待っていてくれるので、それを仕上げたいと思います だって、家事を済ませないと、明日から着ていく服がなかったりするんだもの (苦笑)¹⁴⁾。

〈不都合・受け入れ困難と感じられる事態〉

しかしこれらだけではなく、タリは次のような場合にも用いられる。

(14) 今の話、実は全部うそだったりして。

この文は、「今の話が実は全部うそである」ということに関して話し手が確信を持っていない場合だけでなく、逆にそれを明確に事実と認識している場合であっても、使うことができる。前者の場合には思いつきをそのまま素直に必然性なきものとして認識して提示しているわけであるが、後者の場合には事実であることをあえて必然性のないこととして認識して提示している。そのように提示することによって、聞き手に与えるショックを和らげる効果、つまり緩衝効果が生まれる。

聞き手にとって (意外である、あるいは不愉快であるなどのように) 受け入れがたいと予想される事態について述べる際には、その事態を「ただの思いつき」のような、生起する必然性のないものとあえて認識して提示することが、相手のショックや不愉快さを軽減する一

つの手立てとなりうると考えられる。そこで、聞き手が受け入れに抵抗を感じると予想されること、あるいは、そのような聞き手の反応を予想する話し手にとっては言いづらいことを提示する際に、タリを用いるとやや控えめな印象を生み出すことになるわけである。

つまり、タリの第二の意味・用法として、(15)を設定することができる。

- (15) タリは、その一つの意味・用法として、話し手がある事態をく生起の必然性がない>とあえて認識して、聞き手に提示していることを示す。

同様の例として、次のようなものをあげることができる。

(16) a. 火曜日

特にこの曜日にやることは無いので、主に売り場の手直しなんかをやっています。ポップ見直しとか売り場の什器移動などなど。客数もわりと少ない曜日だったりするのでわりとまったり出来る曜日（ただし私は休みが多い）¹⁵⁾。

[スーパーの店員の日記から]

b. ラブちゃん今日は初トリミングでした

いつもあたしかパパがカットしたりしてるんですよ（笑）

全然関係ないけど、こう見えても美容師免許持ったりする（人間のね）¹⁶⁾

[ペットとの関連で、ブログの書き手自身についての情報を提示]

たとえば(16a)の場合、「火曜日に客数が少ない」という事態は、スーパーマーケットに勤める書き手にとっては常態である。書き手自身にとっては「生起の必然性がない」どころかむしろ逆であり、「火曜日に客数が多い」ことの方がかえって生起の必然性が少ない事態であるはずである。また(16b)で話題にされているのはブログの書き手自身の情報であり、当然書き手が熟知している事項である。これは、ブログを執筆している現在の書き手自身にとっては「生起の必然性がない」とは捉えにくいものである。

しかし(16a)の場合、読み手が客数の推移に気づいていない、あるいはそもそも知識を持っていない可能性が高い。そして書き手はそのことを考慮に入れてこの文章を書いていると想定することができる。そのような聞き手に対する提示の仕方が影響して、話し手は事態に対してあえて「生起の必然性がない」という認識の仕方を選択していると考えられるわけである。(16b)に関しても、読み手は書き手についてのくわしい知識を持っていないと想定するのが妥当である。そのような読み手に対する提示の仕方が影響して、書き手はあえて「生起の必然性がない」という認識の仕方を選択していると考えられる。

これらのタリの例においては、読み手に対して押し付けがましくない提示の仕方を達成するために、書き手は、読み手の知識レベルを考慮に入れながら、事態に対する書き手自身の捉え方を調整しているわけである。つまり(12)において、理解・認識は提示に一方向的に先行するわけではなく、提示のあり方が理解・認識のあり方に影響するわけである。話し手は事態を自分が見たとおりに聞き手に見せるわけであるが、その際、話し手自身の「見方」は、聞き手に対する「見せ方」と完全に独立に、それに一方的に先行して純粹に話し手と対象の関係だけで決まるわけではなく、聞き手の存在が、あるいは、聞き手に対する「見せ方」に関わる事情が、話し手の「見方」に影響を与える面があるわけであり、聞き手の捉え方にあわせて話し手が自身の捉え方を調整することがありうるわけである。

6. その他の事例

同様の観点から考えることができる事項として、婉曲表現がある。

たとえば、粕山(2006)は、「お天気屋」に関して、これが人間の心の状態を天気になぞらえて捉えるメタファー表現であると同時に、「心の状態(=気分・機嫌)が変わりやすい」という、好ましくないと考えられる性質を持った人物を表現するための婉曲表現であることを指摘している。

ある人物を、「お天気屋」と表現するか、「気分屋」と表現するかの背後には、その人物に対する捉え方の違いがあると考えるのが認知意味論の立場である。すなわち、「お天気屋」という表現の背後には、人間の心の状態を天気になぞらえるメタファー的な捉え方があるのに対して、後者の表現にはない。その一方で、「お天気屋」という婉曲な表現を採用するか、「気分屋」という直接的な表現を採用するかは、聞き手が誰であるか、などを含む発話場のあり方によって左右される。すなわち婉曲表現も、事態に対する話し手自身の捉え方が、話し手によって専制的・独在論・個体能力主義的に決められるのではなく、聞き手を含む場面に合わせた調整のうえで選択される場合があることを示すものである。

さらに言うならば、日常の言語表現行為において、話し手は発話場のあり方を考慮し、聞き手の受け取り方を先読みしたうえで自分の表現を調整するのが普通である¹⁷⁾。このことを考えるならば、聞き手や発話場を考慮した捉え方の調整は、言語活動のあらゆる場面に及ぶと考えることができる。

7. 結語

先に、「理解の意味論は、解釈の仕方次第では、〈概念化の主体〉と〈概念化の対象〉という二項関係のみを視野に入れた意味論ということになる。これは極端な解釈をするならば、コミュニケーションに対する自覚的な考慮を欠いた、独在論的な意味論となりかねないものである」と述べた。ここで用いた「解釈の仕方次第では」「極端な解釈をするならば」という

ヘッジに留意されたい。実は、ここで論じてきたような「見せ方の意味論」に近い考え方が、認知言語学に完全に欠落しているわけではない。

Langacker の認知文法では、profile は focus of attention とされ、その attention を向ける主体である conceptualizer は話し手と聞き手の双方を含むとされている。また、言語活動が行われる場としての Ground も、話し手だけではなく、聞き手をも含むものである。したがって、Langacker の認知文法には三項関係ないし共同注意を理論に組み込める可能性がある。実際、Taylor (2002:347) は、Grounding の認知的基盤として、視線の共有 (“shared gaze”) がある可能性を示唆している¹⁸⁾。

しかし、認知文法の枠組みに基づいてなされた具体的な言語表現の研究、とくに大人の文法を対象とした研究において、このような三項関係的な問題意識がどれだけ反映されているかについては、疑問の余地がある¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾。

本稿は、本多 (2002,2005)、宇野・池上 (2002)、Uno (2006) に引き続き、共同注意ないし三項関係を言語の意味の理論に自覚的に取り入れる試みである。

*本稿は駿河台大学における 2006 年度の「認知言語学」の講義内容に基づいている。

注

- 1) この日記はすでに閉鎖されている。
- 2) http://hockey.t.u-tokyo.ac.jp/%7Etsuchiya/.no_title/no_title.sh?year=2006&month=5&day=18
- 3) なお、記事の本文では両紙とも判決全体の内容を紹介している。ただし重点の置き方は異なる。
- 4) さらに深刻な例として、戦争報道の問題がある。これについては、『戦争広告代理店——情報操作とボスニア紛争』(高木徹 (2002/2005) 講談社文庫) に関する琉球大学の道田泰司氏による書評に興味深い記述がある (<http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/%7Emichita/reading/2006-07a.html>)。
- 5) この点に関しては、茂呂 (1996) およびそれに対する本多 (2001,2005) のコメントを参照されたい。
- 6) 土屋 (2006) に優れた洞察が分かりやすい形で提示されている。
- 7) 認知言語学は意味論と語用論の間に明確な境界線を引ことはできないと考えるが、本稿の議論はその立場をさらに進めて、意味論の守備範囲をより広く考える試みである。
- 8) さらにこれらのほかに、フレームの転換による見せ方の転換や、「もう半分」と「まだ半分」の対比などを事例として挙げることができる。前者については鍋島 (2005) が関連する。後者については田村 (2006:55-59) に新聞の見出しの実例が示されている。
- 9) 日本語の終助詞の「よ」「ね」は、(それぞれの理論的な規定は別として) 機能として、それぞれ注意の誘導と追従に用いることができる。
- 10) タリについてのよりくわしい議論は本多 (2007) を参照されたい。
- 11) <http://blog.goo.ne.jp/scuderia-f/e/d8c86c082f8ba437240e56cdfef08f821>
- 12) http://loplos.mo-blog.jp/moge/2004/08/post_5.html#comment-151105
- 13) これについては、著者自身が同じ文献の中で次のような言い換えを行っている。
 - (i) しかし、岐路というのはそういう大げさなことを意味しません。どの道を行っても意外と同じ結

果になるものだ、というような意味です。(サトウ・渡邊 (2005:223))

つまり (13c) のタリは、<当事者にとっての意外性>と関連しているわけである。

- 14) <http://private.rocketbeach.com/mms1131/2000oct.html>。Google のキャッシュにて確認。また、印刷の都合上、顔文字を削除した。
- 15) <http://blogs.dion.ne.jp/gokupara/archives/1815945.html>
- 16) http://www.mypress.jp/v2_writers/rabu1120/story/?story_id=1193243
- 17) 聞き手の解釈の先読みが文法化に与える影響を理論化したものが Traugott の intersubjectification であると言える。ただし Traugott について注 21 も参照されたい。
- 18) Slobin の“Thinking for Speaking”の概念も関連するであろう。また、認識の社会的構成については、古くは Lee (1992) がパフチンの多声性を取り入れた議論を提示している。
- 19) 認知文法の枠組みにおける実際の分析においては、conceptualizer や Ground から聞き手を除外して話し手のみを考慮しても、分析の内容に実質的な影響がないことが多いように見受けられる。
- 20) Verhagen (2005) は例外といえるかもしれない。
- 21) モダリティ論との関連で言えば、第一の用法のタリを言表事態めあてのモダリティと関連づけ、第二の用法のタリを聞き手めあてのモダリティと関連づけることも可能かもしれない。また、前者から後者への拡張を Traugott (1989) の議論に関連づけることも可能かもしれない。ただし、Hopper や Traugott らの理論はコミュニケーションの現場を重視する点では独在論から脱していると言えるが、こちらは話し手と聞き手の二項関係に関心が偏っていて、対象に対する捉え方は二の次になっているような印象を筆者は受ける。

参考文献

- 本多啓. 2001. 「文構築の相互行為性と文法化」、山梨正明ほか(編)『認知言語学論考 No.1』、143-183、東京：ひつじ書房。
- 本多啓. 2002. 「共同注意の統語論」、山梨正明ほか(編) (2002)『認知言語学論考 No.2』、199-229、東京：ひつじ書房。
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論。生態心理学から見た文法現象』東京：東京大学出版会。
- 本多啓. 2007. 「副助詞タリの用法」、『駿河台大学論叢』、33、1-18。
- Lee, D. A. 1992. *Competing Discourses*. London and New York: Longman Group.
- 初山洋介. 2006. 『日本語は人間をどう見ているか』東京：研究社。
- 茂呂雄二. 1996. 「[言語心理学] ことばの「不思議」の究め方」、『別冊宝島 279：わかりたいあなたのための心理学・入門』、59-63、東京：宝島社。
- 鍋島弘治朗. 2005. 「批判的ディスコース分析と認知言語学の接点——認知メタファー理論の CDA への応用」、『時事英語学研究会』、44、43-55. 日本時事英語学会。
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」、西村義樹(編)『認知言語学 1：事象構造』、285-311、東京：東京大学出版会。
- Reed, E. S. 1996. *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford: Oxford University Press. [細田直哉 訳 2000 『アフォーダンスの心理学——生態心理学への道』東京：新曜社].
- サトウタツヤ・渡邊芳之. 2005. 「[モード性格] 論——心理学のかしこい使い方』東京：紀伊國屋書店。
- 田村秀. 2006. 『データの罫：世論はこうしてつくられる』東京：集英社。
- Taylor, J. R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

- Traugott, E. C. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language*, 65 :1, 31-55.
- 土屋賢二. 2006. 「映像よりも本が面白い五百の理由」、『毎日新聞』、2006年3月19日。
- Uno, R. W. 2006. *Detecting and Sharing Perspectives Using Causals: A Case of Japanese Causals*. Ph.D. Dissertation, Department of Language and Information Sciences, University of Tokyo.
- 宇野良子・池上高志. 2002. 「ジョイント・アテンション／予測と言語志向性を揃えるメカニズム」、山梨正明ほか（編）（2002）『認知言語学論考 No.2』、231-274、東京：ひつじ書房。
- Verhagen, A. 2005. *Constructions of Intersubjectivity*. Oxford: Oxford University Press.